

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART

vol.7

ワイン入れ

グルジア
19世紀
18.4×29cm



1998年9月29日(火) - 11月23日(月) 祝

国立モスクワ東洋美術館所蔵

シルクロードのかざり

中央アジアとコーカサスの美術

「かざり」は生きている

— シルクロードのかざり
中央アジアとコーカサスの
美術展によせて —

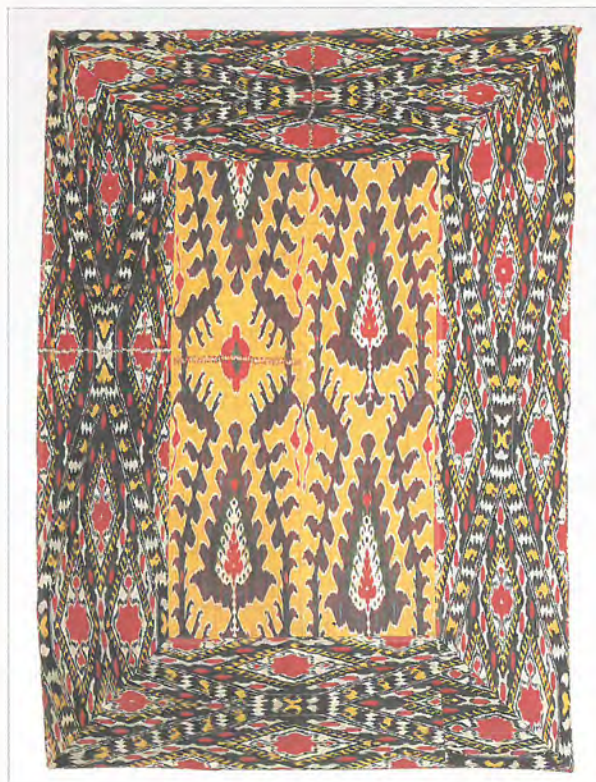
文化は「あそび」とともにあった、というのは、ホイジンガの有名な著書『ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）』のなかの言葉ですが、この言い方を借りれば、文化は「かざり」とともにあった、といえます。飾る行為への情熱は、時間や地域、民族の差を越えて人類共通のものであり、そのエネルギーは永遠に不滅です。

「かざり」への愛好は世界共通ですが、なかでも盛んな地域はどこかと問われれば、まずあげられるのはペルシャ（イラン）を中心とするイスラム文化圏の「アラベスク」と呼ばれる文様です。近頃注目されているアイルランドのケルト民族の文様がこれに次ぎます。日本の伝統文様もこれらにくらべ、ユニークさではひけをとりません。だが、もうひとつ、見逃せないのが、今回紹介する「中央アジアとコーカサスのかざり」です。

ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、カザフスタン、キルギスタン、タゲスタン、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア——二、三を除いておよそ日本人には耳なれないこれらの名前は、ソビエト崩壊によって陽の目をみるまで歴史の陰にかくれていた、さ

婚礼の掛布

ウズベキスタン、ブハラ／19世紀後半／アドラス絨（絹・木綿）／247.0×162.0cm



まざまな農耕民族・遊牧民族による生活共同体をあらわします。それらはもともと、シルクロードの西半分にあたる草原ルートやオアシス・ルートによって結ばれており、たがいの取引のなかから、独特の意匠をつくりあげてきました。ギリシャ、エジプト、ペルシャ、トルコ、スキタイなど、東西のさまざまな文様が、かれらの意匠感覚によって融合され、いきいきとした色と形の生命がそこに誕生しています。

今回の展示は、国立モスクワ東洋美術館の研究者がソビエト時代に収集した三万五千点にのぼるコレクションのなかから選び出されたもので、十八～二〇世紀に上記の地域でつくられた民族美術のさまざま——衣装、装身具、敷物や掛布などの染織を主体に、陶器、金工品、木工品などを加えた約280点が日本で初めて紹介されます。いずれも現在では入手不可能な、民族資料として貴重なものですが、私どもの意図はそれらを「かざり」の観点から見直すことにあります。

まず、織物や刺繍の文様の驚くべき斬新さに注目してください。まるでクレーやカンディンスキーといったモダン・アートの天才たちの作品を見ているような気がします。素材な力強さの点では、あるいはかれらに勝るかもしれません。左右対称の規則正しさにあまりこだわらず、不規則で非対称の色面とかたちを大胆に対比させ交錯させるかれらの文様構成のやりかたは、むしろ、日本の伝統的な意匠との近しさを感じさせます。

最近、キリムという、トルコやアゼルバイジャン一帯でつくられる絨毯が、その文様のモダン・アートに通じる魅力ゆえに、欧米や日本の愛好家をふやしていますが、今回の展示は、そうしたキリム愛好の方々にも見逃せないものでしょう。

祭りの折りなどにかれらが見せる目いっぱい盛装ぶりは、写真に記録されているとおりです。ジャラジャラと身につけている装身具のたぐいは、多くは銀製品で、そのデザインには、はるか古代に遡る伝統が感じられます。昨年、私は今度の展示の交渉のため、初めてモスクワを訪問しましたが、そのとき幸運にも、ある美術館でシェリーマン発掘の有名なトロイの遺跡の出土品を公開しているのにめぐり合いました。それを見て驚いたのですが、日本のびらびらかんざしを思わせる頭飾りや首飾りのデザインなど、中央アジアのそれにそっくりなのです。紀元前のギリシャの王族のかざりが、時をへだてて民衆の生活芸術のなかに受け継がれていることを感じました。

そういえば今度の展示には、銀製の水差しや盥などが目立ちますが、それらのかたちがどこか正倉院の伝来品に通じているのは、どちらもペルシャという共通のルーツに根差しているからでしょう。

農耕や遊牧にあけくれる単調な日々の生活——それが祭りの折りに一瞬、別の輝かしい世界に変貌します。その変容の装置が「かざり」です。「かざりは生きている」——そのことをいきいきと感じ取れるような展示会になってほしいと私は願っています。

千葉市美術館 館長 辻 惟雄

中央アジアとコーカサスの美意識

「かざり」への要求

今回の展覧会「シルクロードのかざり 中央アジアとコーカサスの美術」には、18世紀～20世紀初めにかけて制作された工芸品類約280点が出品される。かつてシルクロードが洋の東西を結び、そこを中心に発展した民族の住むこの広い中央アジア・コーカサス地域の中で、中世～17世紀の作品がほとんど残っていないという事実は、複雑な民族の攻防が長く続き、徹底的な破壊が何度も行われたという不幸な歴史に起因する。人種も言語も非常に入り組んでおり、ソヴィエト連邦の崩壊後もまだ、これらの国々は歴史の影を常にひきずって様々な問題をかかえている。チェチェン紛争、カラバフ紛争、タジキスタン紛争と、重く悲しい現実、日本にも伝えられているとおりである。

しかしそのような状況の中であるにもかかわらず、今これらの作品に見る美意識は、何と力強く個性化することであろう。長く厳しい歴史の中でも、どんなに徹底的に破壊されようとも、脈々と美意識だけが受け継がれてきたという事実に、驚くべきものがある。そしてその美の生命力の強さが、「かざりたい」という一つの要求に支えられていることに注目しなければならないだろう。

ウズベキスタン／20世紀初め頃

女性たちの衣装は、豊かなかざり意識で満たされている。



鮮やかな色の緋、全面を刺繍で埋め尽くした布、華やかな衣装、多様な種類が発達した装身具、大らかで明るい模様様の陶器、逆に緻密な模様を主とする金工品、多様な幾何学模様によって構成された絨毯など、実用品でありながら、この世界では機能よりかざりにエネルギーが費やされている。

機能が優先される現代の日本社会においては、近代

的な「機能美」の方が発達しており、ほとんどの人がかざりたてるよりもシンプルな美を趣味がよいと感じている。しかし中央アジア・コーカサスの美術に表れるかざりへの要求の強さを見る時、我々は、貪欲でさえあるはずのかざる要求を随分抑制し、変容しているのではないかと考えてならない。その装飾的な美術の数々は、今機能的な美に高い価値観を置く日本人にとっても何か親しい美の世界として感じられるはずである。結局日本人はかざりたいという要求を強く持った民族の一つであり、どこかに共通する美意識を持っているのであろう。これら中央アジア・コーカサスのかざりを快く受けとめられるのは、この原初的で純粋な要求による表現が、体の中にある同じかざりの本能に訴えるからとしか思えない。

先進国であればあるほどかざりへの情熱は薄れていく。それより強い欲が社会を支配するようになるということなのかもしれない。日本の機能社会ではもうここ見るようなエネルギーをかざりに費やすことが難しくなってしまったが、かざりへの関心は、ほとんど本能的なものとして残されていく可能性が高い。小さなかざりにも心は癒されていく。中央アジア・コーカサスの力強い表現が、本来求められているかざりの精神を呼び覚ましてくれることであろう。

本当に表現したいものは何なのか、どれだけの大きさで、強さで表現したいのか、美への素直な心の要求を確認する好機ともなればと考えている。



トルクメニスタン／20世紀初め頃

片袖の方に頭を入れるようにして、わざとバランスをくずし、衣服を頭から被って装う。かざりは着こなしによっても表現される。

応用美術と純粋美術

展示される中央アジア・コーカサスの美術品は、それぞれの民族の生活に親しく育まれた美意識の中で生まれたもので、実際に用いられてきた品々がほとんどである。この様な美術は、専門的な用語を使えば、展覧会の英文タイトルに示されたような“Applied Art”、すなわち応用美術と呼ばれる分野に属するものとされている。絵画や彫刻などの純粋美術“Fine Art”と区別する言葉であり、純粋美術の技法を実用品に応用して装飾するという意味でもある。

多くの美術館では純粋美術を中心に展示する。近代に入り、この区分けは意識として明確になり、同時に社会が機能主義へと向かった結果、身の回りの品々はその機能を第一に求められるようになり、純粋美術は一層崇高な立場へと置かれた。千葉市美術館の今回の企画展「イギリス工芸運動と濱田庄司 1900s—1930s・工匠たちのユートピア」展（8月8日～9月15日）でも提示された、日々の暮らしの中に美を求めるといいうゆる「民藝」を評価する動きは、その逆の反応の一つでもあるが、応用美術は、純粋美術よりも低い位置で扱われることの方が多い。

しかし応用美術の発生を考えてみるならば、日本でいえば縄文時代の土器からして装飾は当然のように施されていたのであり、祖先たちは、純粋美術よりもはるかに長く親しく応用美術に接してきたのである。着かざり、生活の場をかざり、また祭礼のためにかざるといふ行為は、ごく自然な美への要求から実現される。生活の場で純粋に欲せられる美意識が表現される応用美術こそが、多様で豊かな美の世界を形成してきたはずである。はたして応用美術を純粋美術より低い扱いをすることは妥当なのであろうか。さらにいうならば、美そのものを考える上で、この区別にどれだけの意味があるのであろうか。

殊に日本においては、基本的に絵画が屏風絵として、また彫刻が仏像・神像としてよく発達しているなど、そもそもその様



頭飾り（護符入れ）「ブトゥンティルノック」
ウズベキスタン／19世紀後半／銀、鍍金、珊瑚、トルコ石／長21.2cm、幅5.7cm

中央アジアとコーカサスには多様な種類の装身具が発達した。その中には、コーランの一節や魔力を持つと信じられているものを入れるための箱や筒のついたものも多い。牛の角片をお守りとして封入したかざりで、額かざりの後部に縫い付けられて、後ろからの邪眼から身を守ると信じられていた。幾重にもペンダントを吊した豪華なものである。

に区別する意識は非常にあいまいであったと思われる。金銀地の屏風、絵画様式自体装飾的と評される琳派の作品が江戸時代に興隆をみたことなどはそのよい例で、これらの作品を「応用美術」と呼ぶわけにはいかないが、その美の性格が、部屋をかざりたいという要求に支えられていたことは確かである。その「かざりたい」こそ、先に述べたように今回の展示品の中に最も強く主張されるものだとすれば、その動機において二者は最も確かで重要な共通の基盤を持っていることになる。

ユルタ（パオ）は、中央アジアの遊牧民が、牧草を求めて移動するたびに分解して折り畳むテントのような住居である。一見質素なこのユルタであるが、この中の生活においても多くのかざりが育まれている。まず中心となるのは絨毯で、我々日本人に

婚礼用の掛布
ウズベキスタン／19世紀末～20世紀
木綿、絹刺繍／130×200cm

大胆で力強い模様は、刺繍で表されている。何とも不思議な花模様を囲むようにして表された唐辛子模様は、赤い唐辛子に災いや邪悪な精神を遠ざける力があると信じられていたことに由来する。また枠内の四隅に表された三角の模様はお守りの形で、新婚夫婦の幸せを願う布でもある。結婚式の時には多くの刺繍製品が準備されるが、これは部屋の壁に吊ってかざられる。



としてはただ敷くためのものであるが、例えばユルタの出入口でドアの替わりをする絨毯、その上部をかざるのれんのような絨毯、また天井部の格子柱にかける絨毯、ユルタを一周するバンドのような絨毯、また移動の時は家畜の背に、ユルタの中では物入れとして柱に吊される絨毯バッグ類など、それぞれに模様をこらした絨毯が他種類にわたり、生活を彩った。さらに刺繍などで装飾した布が壁に掛けられたり、華やかな色彩の糸を葎よしずの一本一本にまいて模様を表した葎よしずが回りにめぐらされた。またそこには、着かざった人々が暮らしたのである。

要するにユルタの中はかざりて溢れている。屏風＝絨毯とまでは言い過ぎであろうが、そのきっかけはどこかでつながっているはずである。まずその様なことから、人間の求める美というものについて考えてみるのはどうであろうか。

中央アジア・コーカサスの美術を扱う総合的な展覧会は、日本で初めてのことであり、ある意味で冒険的な企画でもある。ほとんどの方々は、これらの地域・民族についてあまり予備知識を持たないまま作品をご覧になることであろう。ましてやそれに対する美術的評価など何も存在しない日本に、ほとんど唐突に作品が出現するのである。この世の中では、情報から解放たれて、何の予備知識もなく美術を見ることなどあまりなくなりましたが、これは数少ないよい機会になるかもしれない。

この展覧会に出品されるのは、名のある作家の作品ではもち



女性のベルト
アルメニア／19世紀初／銀線細工、銀粒細工／長92cm

コーカサスでは、銀製品が非常に発達し、様々な技法を駆使した緻密な美しい装身具や食器類が多く生まれた。アルメニア人の装身具職人は、トランスコーカサスの各地の大規模な装身具工房で働いており、その製品は、顧客の好みをよく反映したものとされる。繊細でエレガントな作風であり、ここで使われた銀線細工や銀粒細工技法は、彼らの得意とするところであった。

ろなく、有名な美術館の所蔵ともいえないし、作品の値段が気になるというものでもない。作品についてどんな感じ方をしても、その感想を誰に言っても気遣いのない状態というのは、意外になくなってしまっている。作品それぞれの美を各人なりの感じ方で受けとめることは、美術を鑑賞する上で非常に大切なことだと思うが、実際には意識の中に様々なじゃまが入ってくる。自分が無垢になればなるほど、作品は何かを伝えてくるだろう。この様な初めての美との巡り逢いが実りあるものであれば、必ずその後の美術体験も豊かになるはずである。

(本館学芸員 田辺昌子)

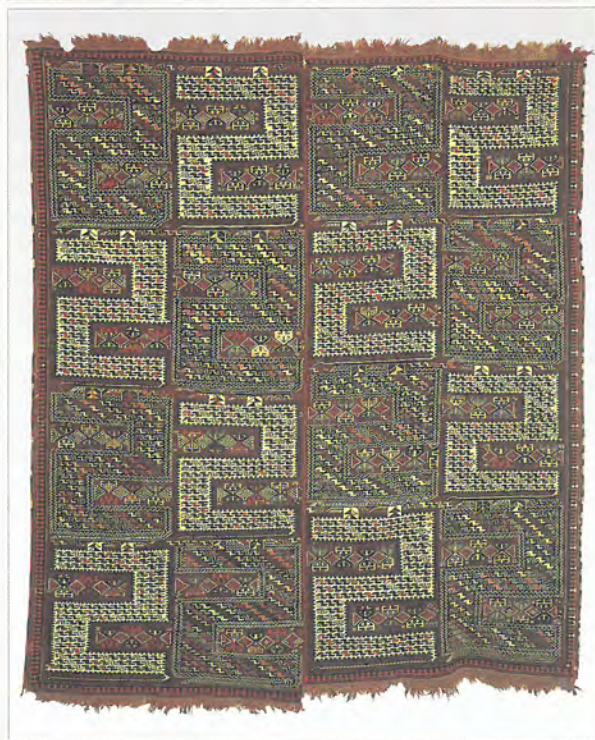
花瓶「グルドン」
ウズベキスタン、フェルガナ／19世紀末／陶器、施釉、彩画／高31.5cm、径18.3cm

中央アジアの陶器は、全体に厚みがあり、大らかな植物模様を発色のよい青色で描いたものが多い。フェルガナ盆地にはリシュタン、ホージェントといった有名な窯場が点在し、このような色合いの陶器を多く製造していた。染織品においても、このような陶器にしても、あまり形を整えることに関心を払わず、むしろそれを楽しんでいる風がある。



平織絨毯「ジリ」
カラバフ／19世紀後半／羊毛、平織／242×220cm

この絨毯の不思議な模様は、この地域に独特のものとして知られたパターンである。緻密な幾何学模様の集合が、数字の2のような模様を作っているが、よく見るとこの「2」から角とじっぽが出てくる。龍のイメージからきた模様といわれるが、そのような理解をはるかに越えた表現である。カラバフは、アゼルバイジャン人とアルメニア人の混住する地域で、全住民が絨毯の生産に関わっていた。



市民ギャラリーご利用の案内

9階の市民ギャラリーは、市内で活動する美術団体の方々に作品を発表していただくスペースです。



市民ギャラリーは①・②・③の三室に分かれ、それぞれが絵画をはじめとして、彫刻や工芸、写真など多様な展示に対応しています。
また、三室を合わせ、ひとつの大きな空間として利用することが出来ます。

12月27日(日)まで、1999年4月～9月までの利用を受け付けます。(ただし、99年1月11～25日および1月29～3月12日の期間は第41回千葉市児童生徒総合作品展覧会と第30回千葉市民美術展の準備・開催のため一般の方はご利用できません)。

【利用時間】 10:00～18:00 (金曜日のみ20:00まで)
【休館日】 月曜日及び年末年始

※ご利用の際の手続きなど、詳しくは美術館までお問い合わせください。

展示室	床面積	壁面延長	壁面高
市民ギャラリー①	162.0㎡	49.0m	3.0m
市民ギャラリー②	136.7㎡	37.6m	3.0m
市民ギャラリー③	162.0㎡	49.0m	3.0m

「友の会」ご入会の案内

企画展・常設展の入場はフリー、図書の特典がございます。是非ご利用ください。

〈入会金〉

- 一般会員..... 1,000円
- 学生会員 (高・専・大)..... 500円
- ファミリー会員 (大人2名と中学生以下の家族) 2,000円

〈年会費〉

- 一般会員..... 3,000円
- 学生会員 (高・専・大)..... 1,500円
- ファミリー会員 (大人2名と中学生以下の家族) 6,000円

【入会のお申込み】

- 美術館受付に備えてある「入会申込み書」を利用し、お申し込みください。
 - 休館日(臨時を含む)や年末年始は、お申し込みできません。
- ※詳細は、千葉市美術館 (TEL 043-221-2311) までお問い合わせください。

ミュージアム・グッズから

美術館所蔵の作品がTシャツになりました。図柄は熱帯魚好きには見逃せない吉田博の「ホノルル水族館」とちょっとアナキーな立石紘一の「ハン」で、価格は2,000円サイズはMとLがあります。



吉田 博 (ホノルル水族館) (左) / 立石紘一 (ハン) (右)

展覧会スケジュール

[休館日] 月曜日(祝日の場合はその翌日) 年末年始 展示替期間中
 [開館時間] 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで) 毎週金曜日は午後8時まで(入場は午後7時30分まで)
 [ハローダイヤル] 043-227-8600



国立モスクワ東洋美術館・コーカサス美術常設展示室

国立モスクワ東洋美術館所蔵 シルクロードのかざり 中央アジアとコーカサスの美術

9月29日(火)～11月23日(月・祝)

国立モスクワ東洋美術館は、ロシアで唯一、東洋美術を専門に収集・展示している美術館です。なかでもモスクワから近いアジアである中央アジア、カスピ海の西に広がるコーカサスは旧ソビエト連邦に属しており、これらの地域の民族美術の魅力伝えるコレクションは、同館の核となっています。本展は、これらの伝統的なデザインによる美しい工芸品約280点あまりを通して、民族の身近に息づいてきた美の在り方をとらえ、その力強く熱狂的なまでの“物をかざる”という美への行為を間近に感じていただくとするものです。この地域の美術を紹介する総括的な展覧会は日本でも初めてであり、新たなアジア美術への視点が開かれることが期待されます。

これからの関連講演会のご案内

「コーカサスの自然・生活・美」

【講師】 杉村 棟氏

(本展監修者/龍谷大学教授/国立民族学博物館名誉教授)

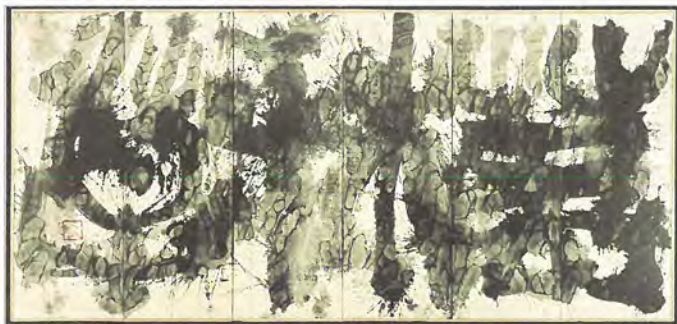
【日時】 10月31日(土) 午後2時より

「アジアの情熱 — かざりの美意識 —」

【講師】 辻 惟雄 (当館館長)

【日時】 11月15日(日) 午後2時より

※いずれの講演会も当館11階講堂にて開催(先着150名)



勅使河原送風(萬木千草)1960年/墨、六曲一双屏風/170.0×364.5cm 千葉市美術館蔵

草月とその時代 1945—1970

12月5日(土)～1999年1月10日(日)

ただし12月28日(月)～1月4日(月)は年末・年始のため休館

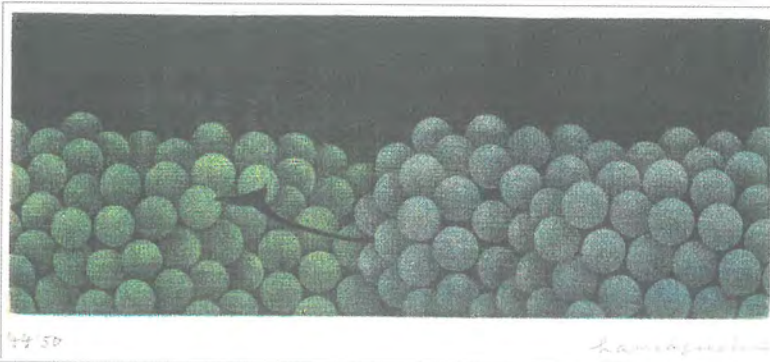
本展では、初代草月流家元である勅使河原蒼風(1900～79)と、その精神を引き継いだ現在の三代目家元、勅使河原宏(1927生)を軸とする草月流の活動を通じて戦後日本の現代美術のあゆみをたどろうとするものです。ふたりが幅広いジャンルのアーティストたちと親交を結び、その課程で収集された作品群は国内の現代美術コレクションのなかでも高い水準を誇ります。今回は、草月流の

全面的な協力により、草月美術館の現代美術部門の作品および国内所蔵の関連作品・資料約370点を基に「草月」によってリードされた戦後における前衛の全体像を紹介します。

なお会期中の日曜日には、11階講堂で「草月アート・センター(通称SAC)」で上映された実験映画のわずかなを挙に上映する予定です。(日時未定)。

■展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。

美術館の所蔵作品より



浜口陽三〈二色のぶどう〉 1968年/メゾチント、紙/6.0×15.0cm

暗闇のなかに、ふた房のぶどうが横たわっています。まるで織物のような、優しくやわらかな質感。このような造形が堅い金属の板から生まれると聞いて、驚かれる方も多いのではないのでしょうか。

作者の浜口陽三は1909年、和歌山県に生まれました。実家は銚子に代々続く醤油醸造元で、浜口自身も6歳の時同地に移り住んでいます。はじめ彫刻や油彩を学びましたが、1950年前後に銅版へ転向、運命の技法ともいべきメゾチントに出会います。以後深々とした黒地に果実や小さな生き物を配した独自の作品世界を展開、その静謐な作風が高い評価を受けています。

メゾチントとは、17世紀のオランダに生まれた金属凹版の一種です。あらかじめ版画にびっしりとキズをつけておき、そのキズのひとつひとつを調整しながら黒から灰、白に至る精妙な諧調を表現するという、途方もない労力を要求する技法です。浜口はすでに忘れられていたこの手法に新たな解釈を加え、さらには黒・青・赤・黄の四版を用いる多色印刷を案出してメゾチントを現代に復興させました。浜口が施す網目状のキズは、紙の上でまさしく縦糸や横糸となって織物の手触りを生み出しました。そして眩暈を誘うような輝く色彩は、四色の粒子が紙の上で重なり合うことにより可能となったのです。

〈二色のぶどう〉は1960年代、浜口の版画がひとつの高みに達し、代表作が次々に手がけられてゆく時期の作品です。作家はぶどうの房をまるごと描かず、四角く切り取り、粒を規則正しく完璧な円に還元することで、果実という移ろいやすい「なまもの」をより記号的な、普遍的な存在へと昇華しています。うっすらとのぞく紙の地色は、ぶどうを内から照らす光となってこの事業に参加しています。ぶどうは次第に生々しさもスケール感も失い、とてつもなく大きなもの — たとえば山塊や彼方の天体 — に見えてはこないのでしょうか。6.0×15.0cmというきわめて小さな画面に、気の遠くなるような手仕事の反復こそが生み得る、奥深い空間の現出を見る思いがします。

(本館学芸員 西山純子)

美術館ご利用あない

1-2階 SAYA-DO HALL
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物(ネオ・ルネサンス様式)を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7階 AV CORNER
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧ください。

10階 ART LIBRARY
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00~18:00

11階 RESTAURANT
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

[営業時間] 11:00~21:00

●JR東日本千葉駅利用

東口より徒歩15分 京成バス大学病院行(のりば⑦)「大和橋」下車徒歩2分
京成バス矢作台市営住宅・川戸行(のりば⑦)または小湊バス八幡宿駅行(のりば④)「広小路」下車徒歩1分 無料巡回シャトルバス・チーバス(のりば⑨)「中央区役所・美術館前」下車11:00~18:00の毎時05分と35分に発車(水曜日運休)

●京成電鉄千葉中央駅利用

東口より徒歩約10分

